

# 田村直臣の「児童中心のキリスト教」

帆 苺 猛

## 一 序論

田村直臣は米国長老派の宣教師カラゾルスの建てた築地大学校で学び、第一長老教会の設立に関係した、いわゆる築地バンドに属する代表的なキリスト教指導者である。しかし、築地バンドに属する人たちは、横浜バンドに属する植村正久や井深梶之助、札幌バンドの内村鑑三や新渡戸稻造、熊本バンドの小崎弘道や海老名弾正などと比べると、あまり注目されてこなかった。<sup>①</sup>田村についても、彼の英文の著作『日本の花嫁』が日本の恥部を故意に暴露したものだとして非難を浴び、最終的に日本基督教会の教職を剝奪されることとなった出来事、いわゆる「日本の花嫁事件」についてはかなり詳しく論及されている。<sup>②</sup>また、彼の足尾銅山の鉱毒事件とのかかわりについてもいくつか報告されている。<sup>③</sup>しかし、彼が若い時分から晩年に至るまで力を注いだ児童との取り組みについてはあまりまとめて語られてはいないように思われる。

田村はまず、日曜学校に早い時期から関わっており、日曜学校協会の設立にも大きな寄与をなしている。また同時

に、子供向けの読み物を非常に早い時期に口語体で発表して児童文学のパイオニア的な働きをなし、さらには、「児童中心のキリスト教」を主唱して子供を教会の中心に位置付けていく。それだけではなく、明治四十四年というかなり早い時期に『子供の権利』という著作を日本で初めて著して子供の人權を位置付けようとした。また彼の場合、そうした児童との取り組みを、単に聖書・キリスト教の立場から論証しようとするのではなく、当時盛んになりつつあった心理学の知見を交えて論証しようとしており、児童の心理についての著作も出版している。田村は一八八二（明治十五）年にアメリカに渡り、フルベッキの母校であるオーバーン神学校に入学する。その後さらに、プリンストン神学校に入学し、併せてプリンストン大学にも籍をおき、心理学の講義を聴き、大学からM.A.の学位を授けられる。彼自身は、アメリカに渡る前から心理学の著作を読み、関心を持っていたというが、この心理学に対する関心は終生変わらなかった。その点に彼の特徴を見ることが出来る。

本論では、そのような田村直臣の児童との関わりを概観しつつ、とくに、彼の『児童中心のキリスト教』を中心に、その成立の背景、および、その主張するところを見ていきたい。

## 二 田村直臣の児童とのかかわり

田村はかなり早い時期から児童に対する教会の活動、すなわち日曜学校（安息日学校）にかかわっている。彼によると、明治十一、二年ごろ京橋新肴町の教会で日曜学校の先生をしていた、という。<sup>4)</sup>彼は熱心に日曜学校にかかわり、人々からは「子供狂」とまで言われたとのことである。彼が日曜学校にかかわったのは、「生来子供が好きで、日曜学

校を教ふるは、一ツの楽しみであった」からであり、「日本の教師中、私の如く、初めから、子供に熱心であった者は、稀であつたらふと思ふ。私は日曜日に子供を教ふるか、又は子供に話をするかして子供の顔を見ない日曜日は一日もなかつた」という（『信仰五十年史』警醒社書店、一九二四年、九十三頁）。比屋根安定も「田村が、早くに日曜学校に着目したのは、たしかに卓見である」と田村の日曜学校に対する先見性を評価している<sup>5)</sup>。

田村は一八七四（明治七）年十月十八日にカラゾルスからバプテスマを受け、同日に、築地に第一長老教会が設立された。しかし、カラゾルスがミッションと対立してミッションを離れたことにより、第一長老教会は二派に分裂する。カラゾルスを慕う田村ら十八名は、一八七六年四月銀座三丁目幸福安全社の二階を仮会堂として独立教会を設立し、銀座教会と称する。その後、二、三カ月して原胤昭の経営する原女学校の講堂を借り受けてここで三年間伝道活動を続けた。その間、一八七七年、東京一致神学校が設立され、田村はそこに入学し、一八七九年十二月二十四日に按手礼を受けて銀座教会の牧師になる。ところが、原女学校が廃校となり、さらに、原胤昭の手を離れることになって、銀座教会はそこを追われる。しかし、さいわいにも津田仙の好意により、彼が経営していた、京橋新着町の農学校の分校を譲り受けることができ、そこに新会堂を建設し、京橋教会と改称する。時に一八八〇（明治十三）年の春であつた。

上記のことから考えると、田村が京橋新着町の教会で日曜学校に夢中になって関わつたのは、明治十三年以降のことになるが、しかし後述するように、一八七八（明治十一）年の最初の日曜学校合同大会に参加し、そこで講演しているのを見ると、これ以前から日曜学校に関わつていたのは確かであろう。

上で述べたように、一八七八（明治十一）年五月十五日に東京築地新栄教会会堂で最初の日曜学校合同大会が開催

された。そこで彼は講師として「安息日学校を盛大にすべき方案」について講演をしている。ただ、このとき集まったのは大半がミッション・スクールの女学生だったようであり、日曜だけの生徒は二百名ほどであったようである。

このほか、彼は「日曜学校協会」の設立にも大きな寄与をなしている。まず、明治三十年代に各地方に日曜学校の組織ができる。東京の京橋部会では田村が会長となる。さらに、全国組織の結成の機運が高まり、一九〇六（明治三十九）年に準備の委員会が組織され、田村はその準備委員となる。田村の自伝によると、一九〇六年鎌倉で日曜学校の夏期講習会が開かれた折、有志の者たちが日曜学校協会を組織し、田村が会長に選ばれた、という。ただ、これはほとんど活動せずに終わってしまったとのことである（『信仰五十年史』二九一、二九二頁）。ただし、『日本日曜学校史』ではこの件については触れられていない。アメリカの宣教師の協力もあつて、翌一九〇七年に日本日曜学校協会が設立される。田村は日曜学校協会の設立に際しては、日本人本位とすべきであり、専任の幹事は日本人であるべきだ、と主張する。この意見が受け入れられ、会長は小崎弘道、専任主事には新井正平が選任され、田村は文学委員長となる。田村は一、二年後に教育委員長も兼ねることになる。

田村の日曜学校協会における大きな業績は、十三カ年継続の段階別の教会学校教案をほとんど独力で作成したことである（ただし、『日本日曜学校史』では幼稚科二年、初学三年、中学科三年、高等科三年の十一年制別の教科書としている）。ただ、田村が宣教師たちを排してほとんど独力で作り上げたことに対してメソジストの宣教師スペンサーらが激しく反対をする。その後、日曜学校協会で外国人の幹事を置く案が出され、田村はこれに反対するが受け入れられず、彼は日曜学校協会を去ることになる。田村が去った後、田村の教案は廃止され、新しい教案が作成される。

上記のような対立が背景にあつたのであろうが、一九二〇（大正九）年に世界日曜学校大会が東京で開かれたとき、

田村には招待状がこなかった。比屋根は、田村が会場の玄関前で右往左往しながら、だれでも構わずつかまえて、五月人形の鍾馗が火事見舞いに来たような真赤なすごい顔をして「おれの所へ招待状が来なかった」とわめいていたと伝えている<sup>(6)</sup>。比屋根も「これは何らかの手違いであつたであろうが、田村を無視するとは失礼千万」であると付け加えている。このようなところには、田村の他人と協調しがたい性格があらわれていると見ることが出来る。

また彼は日曜学校協会が設立された一九〇七（明治四十）年に、『二十世紀の日曜学校』という著作を著している。ここにも、彼の日曜学校に対するなみなみならぬ意気込みが感じられる。まず書名に「二十世紀の……」と付していることに彼の時代意識を見て取ることが出来る。彼は序文の中で、ここ二十五年児童学、教育学が大きく発達してきたことを指摘する。そして、日曜学校教育もそれらの学理的な原理に則るべきことを主張する。彼はこれらの知見を欧米の新しい研究書を通して得ている。しかし他方、彼にとつても教育の中心はあくまでもキリストであり、キリストが真の教師である。田村にとつては学理的ということとキリスト中心ということは矛盾するものではない。キリストこそが児童の真の理解者であり、キリストの教授法こそが心理学をわきまえた学理的なものであつた。

この『二十世紀の日曜学校』は主として日曜学校の教師に向けて書かれたものである。まず、第一編では総論として日曜学校の使命や歴史などを述べ、さらに第二編では日曜学校の管理、第三編では日曜学校の教授法など、具体的な事を詳細に論じている。そしてさらには、付録として欧米の参考書を多数掲げ、それぞれに短い論評を加えている。この付録の文献表は、彼が日曜学校や児童の教育について欧米の文献に幅広く通じていたことを如実に物語っている。また注目すべき点は、彼が日曜学校と共励会を二相一体のものともみなしていることである。彼は共励会の役員も兼ねていたが、日曜学校と共励会を合同させようと企てた。しかし、これが失敗し、共励会の方は手を引き、日曜学校に

専心することになる（『信仰五十年史』二九六頁）。

また彼は、児童文学の分野でも精力的に活躍し、児童文学のパイオニア的な働きをしている。田村自身、自伝のなかで「私の文学界に於て、最も誇りとすべき事は、言文一致で、『童蒙道しるべ』と題する児童の読物を公にした事である。日本に於て、児童の文学に筆を下した者は、誰れよりも私が最先である」（二六九頁）と語っている。この『童蒙道しるべ』は一八八八（明治二十一年）年に十字屋より出版されている。これはアメリカの伝道師リチャード・ニュートン（二八一三—一八八七年）の著作から田村自身が翻案したものであり、数寄屋橋教会の日曜学校で話したものが元になっている、ということを経言の中で説明している。彼はさらに自伝の中で、すでに一八七九（明治十二）年に『太鼓打ち』と題する書を著したと語っているが、勝尾金弥の研究によると、これは一八八〇（明治十三）年に発行した『童蒙道の菜』を指しているのではないか、という。<sup>9)</sup>この他にも彼は『童蒙をしる艸』、『幼年教育百話』など数多くの児童向けの書物を出版し、さらには『わらべ』や『いのち』といった児童向けの雑誌も出版している。

牧師であり、小説家でもあり、明治期のキリスト教児童文学についての著作もある沖野岩三郎は田村の児童文学について、「百島冷泉の文学的才筆に及ばず、三浦徹の緻密なる筆に比して遥かに粗雑である。その小冊子に書かれた話は、伝道用としてかかれたものであるから、必ずキリスト教的教訓がある。これが児童文学としての価値を削減せしめた所以である。けれども、其の文学の香が高くなくない所に、此の冊子が、毎号万を以て数える冊数を発行し得たのだとも言い得るのである」という。<sup>10)</sup>しかし、沖野も「田村直臣が敢然として児童本位体制を整へて、雑誌に単行本に児童の読物を書き、教会に附属幼稚園を設けたのは、異常な努力であると共に、普通教師のなし得ざる事をなした功労者といはなければならなかつた」とその業績を評価している。

詳論はしないが、たしかに、彼の作品を読んでも、教訓くさく、話としても面白味が乏しい。しかし、当時日本においてよい子供向けの読物はほとんどなかった。田村自身もこのことを嘆いている（『子供の権利』警醒社書店、一九一一年、二〇一―二〇三頁）。また、当時キリスト教界では日本人に対する道徳的な感化を自らの使命と考えていた。それを文学作品を介して行おうとする主張もなされ、また具体的な試みもなされていた。それを田村は児童文学の領域で、児童に対して試みようとしたのだと見ることができるとは。しかも、それがかなりの部数出版され、販売されたということも評価すべきことであろう。

田村のこうした児童向けの物語について、勝尾は、児童文学史の立場から田村が一八八〇（明治十三）年といった早い時期に『童蒙道の乗』という本格的な児童書を刊行しているという点、明治二十年代の前半に『童蒙道するべ』によって、こなれた言文一致の文章で児童の書物をあらわしたという点に田村の児童文学史上の先駆的な役割を高く評価している。これは勝尾にとどまらず、近年の児童文学史の書物の中でも田村についての業績が高く評価されている。<sup>11</sup>

### 三 児童中心のキリスト教の形成

さて田村は、一九二五（大正十四）年に『児童中心のキリスト教』（大正幼稚園出版部）という書物を著し、その中でキリスト教会は「児童本位」、「児童中心」でなければならぬということを主張している。しかし、彼がそのような考えを抱くにいたったのはこれよりもかなり以前からであった。彼は自伝の中で次のように語る。

「二十世紀大華伝道の運動が終結すると同時に、私の生涯に於て、実に革命的な一大変化が起こった。其れは外ではない、明治十二年十二月、牧師の職に就いて以来、殆んど三十年間、私は神の教会建設の方針は、罪惡に沈んで居る其の人を救い教会に導き、其の大人を本位として、教会の基礎を置いて居った。私はこの方針の外には、教会を建設する道がないと考えて居った。日本の基督教会の歴史に於て、私は路傍説教の開拓者、またリヴァイヴァルの運動には率先して飛出しもし、随分此の方面に奮闘努力したものである。教会に於て、一度に八十名もバプテスマを施した事もあった。併し私が真実三十年間の牧師生涯を回顧すれば、其れは実に失敗の絵巻物であつたと云わざるを得ない。其時代に信者となりし人々で今日迄其の信仰を続けて居る者が幾人あるか。またバプテスマを受けし老人にして、基督教の真髓を味つた者は幾人あるか。基督者の名を有し、教会に籍は有つても、依然として、其の信仰は仏教的ではないか。茲に於て、信者と云う者は、一夜作りで出来得るものではないと云う事を染々感じた。我等の説教の多くは、空鉄砲で、人には当たらない。我等は基督の教訓に背き、勞して益少なき事に努力した。心理学上宗教の基礎は、児童に在りと云う事を知らなかつた。……私は二十世紀大華伝道の結果を見て、大人よりは児童の宗教教育が尚々大切なる事を知り、残る生涯は、大人にあらざして、児童に捧げたのである」(『信仰五十年史』二八〇—二八三頁)。

田村が「児童本位のキリスト教」の立場を取るようになったのは、二十世紀大華伝道がひとつのきつかけになつたのだ、という。二十世紀大華伝道は、一九〇一年に二十世紀を迎えるのを契機として、福音伝道会を中心にキリスト教会がこぞって力を合わせて伝道を推し進め、大きな成果を収める。田村は「日本の花嫁事件」で一八九四年、日本基督教会の教職を剝奪された。しかし、その後も独立教会の形で教寄屋橋教会の牧師を務め、自らは自営館を営んで



いた巢鴨に引きこもっていた。ところが、二十世紀大挙伝道が始まってから、銀座教会の牧師であった鵜飼猛が田村を引つ張り出したのだ、という（『信仰五十年史』二七〇頁）。

田村は、二十世紀大挙伝道の結果リバイバルに問題を感じて児童本位のキリスト教を主張するにいたった、と語っているが、その間の状況を組合系の新聞『東京毎週新誌』、および、植村正久が編集し、実質的には日本基督教会の機関紙のような役割を果たしていた『福音新報』を通して概観してみたい。

田村が属していた京橋区は、鵜飼が支部長、バプテストの宣教師タツピングと田村が副部長として大挙伝道が開始される。京橋区の大挙伝道は一九〇一年五月十二日から始まり、銀座で十二、十三日祈祷会が挙行される。両日とも鵜飼猛が司会をし、田村が奨励をなしている（『東京毎週新誌』九二五号、一九〇一年五月十七日）。田村も大挙伝道の委員として積極的に協力している。京橋区の大挙伝道は大成功を収めた。田村自身もこの京橋区の大挙伝道について報告をしている（『東京毎週新誌』九三六号、八月二日）。それによると、求道者、改悛者は千三百人あまりに達し、献金は七百円ほどにのぼった、という。田村によると、この成功はさまざまな教派が一致団結して伝道にあたったこと、もっぱら十字架の福音を語ることに務めたこと、毎回祈祷会を持つて備えたことなどをあげている。

同年の七月六日に東京青年会館で大挙伝道の感謝会が開かれ、そこで東西に巡回伝道者を派遣することが決議され、田村は綱島佳吉と共に八月七日から三週間ほど、東北、北海道に大挙伝道の報告および巡回伝道に赴く。この巡回伝道について田村自身も報告している（『東京毎週新誌』九四三号、九月二十日）。京橋区は第一回目の成功を受けて、十月六日より第二回目の伝道を行う。このときには、提灯隊が組織され、田村自身が先頭に立って銀座を行進し、路傍演説を行ったという（『東京毎週新誌』九四七号、十月十八日）。また、田村の牧する数寄屋橋教会では小児隊を組

織し、賛美歌を歌いつつ行進したという（『東京毎週新誌』九四九号、十一月一日）。京橋区の第二回大挙伝道も成功を収め、この後も運動を続けることを決議する。

「日本の花嫁」事件以来、田村と対立関係にあった植村正久が発行していた『福音新報』では三二四号（一九〇一年九月十一日）で「福音同盟会と大挙伝道」と題して二十世紀大挙伝道の問題点について指摘している。要点は、福音同盟会が果たして大挙伝道をするのにふさわしいのか、信仰内容があまりに協力的でも十分な伝道が行われないのではないか、より旗幟鮮明な組織を整えて伝道すべきではないのか、というものである。こうした福音新報の批判が植村正久、海老名弾正のキリスト論論争につながっていったのは周知のことである。

しかし、この批判によって直接田村が大挙伝道から手を引いたのだとは思われない。前述のように、田村は京橋区の秋の第二回大挙伝道でも中心的に活動しているからである。ただ、『福音新報』では三三五号（十一月二十七日号）では、大挙伝道の成果を認めつつも、その問題点、欠点を再度指摘している。欠点として挙げられているのは、中心となるべき人物がいらないこと、方法があまりに機械的、画一的であるということであり、必ずしも田村や特定の人物を批判したものではない。ただ、總會の中で大挙伝道の成果に歓喜した組合派のように、大挙伝道を手放しで喜ぶことはできない、と組合派を牽制している。

田村がどうして二十世紀大挙伝道から手を引いたのかは、調べた資料からは必ずしも定かではない。ただ、田村としては各教派がそれぞれの違いを乗り越えて伝道を行い、それが成果をあげたことを高く評価していた。これは組合派などの見解もそうであった。植村らの批判によってそうした伝道活動に水をさされる思いがあったのは確かであろう。

いずれにしても、田村は一九〇一年十一月の終わりには大拳伝道から手を引き、それに代わって、足尾銅山の鉱毒被害者の救済活動に力を尽すことになる。鉱毒運動に彼を導いたのは婦人矯風会の幹部であり、鉱毒被害者の救済のため婦人の先頭に立つて活動していた潮田千勢子である。潮田の懇請により、田村は石原保太郎と共に十一月二十八日に鉱毒地を視察、二十九日には東京キリスト教青年会で鉱毒地救済演説会が開催され、田村も弁士の一人として演壇に立つ<sup>12)</sup>。以後、彼は鉱毒問題に深く関わっていく。

その後、田村は自らが経営する自営館の借金問題のために苦勞することとなり、その解決のために一九〇四（明治三十七）年渡米する。田村は彼を援助していた篤志家と相談し、その援助を得て借金の問題を解決し、自営館の事業を廃して、田村塾と改称する。この田村塾も一九一九（大正八）年に廃止され、それに代わって大正幼稚園を創設し、幼稚園事業に乗り出す。

以上、大拳伝道以後の田村の歩みを概観したが、このような田村の歩みを見ると、彼が「二十世紀大拳伝道運動が終結すると同時に、私の生涯において、実に革命的一大変化が起こった」（『信仰五十年史』二八〇頁）、そして、リバル運動に問題を感じて「児童本位」に向かったと語っていたが、しかし、これは必ずしも正確ではないと思われる。まず、田村の自伝『信仰五十年史』が書かれたのは一九二四（大正十三）年であり、『児童中心のキリスト教』が書かれたのは、一九二五（大正十四）年である。これらの著作は大拳伝道のときから二十年以上も後になってから書かれている。したがって、歴史的な経過についての認識がいまいちになっていたことが考えられる。実際、彼の自伝の中には年代や歴史的な経過について誤りが見られる。とくに、彼は『信仰五十年史』では、鉱毒問題との関わりを一九八七（明治三十）年として、大拳伝道の前の出来事としているが、実際は、すでに述べたように、一九〇一（明

治三十四)年であり、大挙伝道の後のことである。

くわしくは後に見ていきたいが、彼が児童を教会の中心に位置付けようと考えたようになったのは、大挙伝道の結果というよりも、むしろ彼の中で、児童の位置付けが徐々に高まっていったと考えることができる。彼はすでに、大挙伝道に関わる以前から、日曜学校の働きや児童向けの読物を出版する形で具体的に活動しており、子供、児童に関する伝道の重要性を強く認識して、実際に、児童に対する伝道の重要性を主張してもいる。

彼は一八九七(明治三十)年一月に、ハムモンド著『子供を基督に導くの秘訣』を翻訳して出版した。それに添えた田村自身の序文の中で次のように語っている。

「凡そ基督の下にありて有用なる人物たらしめんとせば、未だ世の悪風に染まざる幼稚の時より之を導くを最も優れりとす、凡そ其教会の基礎を強固にし信仰の美果を収めんとせば、小児の教養決して等閑に附し去るべきにあらず、今日我國の諸教会及び其家庭に於て、小児教養のこと元より意を用いざるにあらずといえども、亦甚だ熱心なりと云ふべからず、予不肖と雖も常に此点に憾みなき能わず」。

ここでは、子供が世の悪風に染まる以前から導いていくことが大切であることを主張して、子供への教育の重要性を強調している。これは彼が『児童中心のキリスト教』においても力説していることである。したがって、このように伝道、もしくは、教育の主体を子供に置こうとする傾向は大挙伝道に関わる以前から彼が抱いていたことであった。

ただ、彼がとくに子供に関心を集中していくのは、むしろ日曜学校協会の形成に関わる一九〇六年以降になってからと思われる。この時代以降数年間の間にとくに彼は日曜学校に精力を傾け、日曜学校や児童に関する著作も多くなっている。この時期、彼は日曜学校の教材や子供向けの読物、雑誌のほかに、すでに述べたように、一九〇七(明治

四十)年に『二十世紀の日曜学校』、一九二一(明治四十四)年に『子供の権利』とそれぞれ子供に関する単行本を出版している。これらの著作の中には『児童中心のキリスト教』の考え方と重なる部分が見られる。

『児童中心のキリスト教』の序文においては田村は、「二十世紀に足を入れると同時に、神の御国建設に於て、今日までの大人本位を棄て、児童本位を取った」(一頁)と語る。ところが、この決心に対してキリスト教会から非難が続出し、田村は変わり者、奇人呼ばわりされた。「併し私は二十五年一日の如く、この主義のため奮闘努力し、祈りを以てキリストの児童観を研究し、年を重ねるに従つて、私は私の信念の誤らざるを深く悟つた」という。ここで、田村は二十世紀の初めごろから「児童本位」の立場を取つたが、その後二十数年かけてそれを確立していったことを示している。

このような田村の「児童本位」の立場への変換は、欧米の教育学や心理学の発展と密接に関係している。田村も「十九世紀の終わり頃より二十世紀にかけて、児童学と児童心理学と教育学の進歩につれて、児童の地位が段々高くなつてきたのは、子供にとつてのみならず、社会にとつて非常に幸福なこと」(『子供の権利』一九〇頁)であると語っている。田村はそのような欧米の学問や社会の動きに敏感であつた。しかし、このような、欧米の児童に関する研究の発展は田村のみならず、日本の学問界にも大きな影響を与えずにはおかなかつた。欧米の新しい研究を受けて、日本でも児童研究が展開されつつあつた。その代表的なものは一八九八(明治三十一)年に高島平三郎らによつて出版された児童に関する研究雑誌『児童研究』や、東京女子師範学校の教員が中心になり、幼児教育の研究団体であるフレール会によつて一九〇一(明治三十四)年に発行された『婦人と子ども』である。このような児童研究が盛んになつてきた背景には、明治三十年代になつて、公教育としての義務教育体制が整い、義務教育との関係の中で家庭教育が

問題とされてきたことがある。田村も新しい児童心理学を背景として児童研究に携わっていた高島らを強く意識している。ただ、田村にとってはそれらの研究者が宗教教育を理解していない、もしくは、無視していることが大きな問題と感じられた(『子供の心理』一三三頁)。彼にとっては宗教教育こそが児童の教育の基本とならなければならなかった。これは教育勅語などでは済まされるものではなかった。彼は自らが新しい心理学の知識を備え、かつ、宗教教育に対しても専門的な学識をもったパイオニアであるという自負心を持っていた。

また、彼の「児童本位のキリスト教」は、神学の新しい流れからも影響を受けている。彼は自伝の中でリバイバル運動に対する批判を繰り返していたが、これはすでに『二十世紀の日曜学校』でも、「リバイバル(信仰復興)よりも教育」(五一―六頁)とのテーマで、より温和な形で、展開されている。彼によると、子供が成長して罪人となり、その罪人が悔い改めて救いに導き入れられるといったリバイバルによる伝道よりも、子供をそのまま教育してキリストに導くほうがはるかによい伝道方法である、というのである。

このようなリバイバル批判の論拠として彼がしばしば引用するのは、ブッシュネル(H. Bushnell, 1802-76)である。ブッシュネルについては、すでに『東京毎週新誌』(八七六号、一九〇〇年六月七日)でも紹介され、リバイバルに頼るよりも児童のときから家庭においてキリスト信徒として教育、養成すべきだという彼の見解が肯定的に評価されている。このようなブッシュネルを初めとして、アメリカの日曜学校運動を支えた人たちの神学、考え方が田村に影響を及ぼし、彼の「児童本位のキリスト教」形成の背景のひとつになっているのは確かであろう。

また田村は、エレン・ケイ(一八四九―一九二六年)の『児童の世紀』(一九〇〇年)についてもしばしば言及している。エレン・ケイにならって、彼も「二十世紀に必ず起こって来る重大なる問題は子供の権利」(『子供の権利』二

頁)である、と主張する。かつて、彼は日本で女性の権利がないがしろにされているのを批判して『日本の花嫁』を著したが、それが同労のキリスト教徒たちからも厳しい非難を浴びた。しかしここに至って、ようやく女性の権利が発展してきている。子供の権利の場合も同じだ、というのである。彼にとつては、欧米に見られるように、文明の発展に伴って女性の権利や子供の権利が社会に認められるようになるのだ、という素朴な文明の発展史観のようなものがあつたのであろう。これは、植村など多くのキリスト者にも見られるものであつた。しかし、当時子供の権利やその社会的地位についての意見がほとんどない中で、子供の権利を認め子供を中心に置こうとした、その先見性は評価されるべきであらう。

ただ、田村はエレン・ケイの『児童の世紀』を高く評価しつつも、そのキリスト教批判は間違ひである、という。そして二十世紀ではなくキリスト紀元こそが『子供の紀元』である、と主張する。もちろん、キリストこそが子供を受け入れ、尊重し、子供の価値を認め、子供を評価したからである。

それからさらに、田村が「児童中心のキリスト教」を確立しようとしたのは、彼が一九一九(大正八)年から開設した幼稚園事業とも密接に関係していたと思われる。彼にとつては苦学生や青年の援助のために開設した自営館の事業は借金で立ち行かなくなつた。それを引きついで田村塾も行き詰まる。そうした中で、幼稚園事業に乗り出し、大正幼稚園を創設する。彼は幼稚園事業においては必ずしもパイオニアではなかつた。しかし、彼にとつてはこの幼稚園事業こそが「児童本位のキリスト教」の展開の場だつたのである。彼は自伝の中で幼稚園事業について次のように語る。「幼児に宗教的教育を施し、心理の発達に従ひ、歩一歩、其の歩みを進め、児童より、青年に宗教教育を授け、其の知識も信仰も全く基督化させて教会員となすが、我が教会の理想にして、幼児が即ち我が教会の基礎である。神

の子たる幼児を悪魔の手に渡さず、教育と境遇とに依つて、知らず知らずの内に基督化するが、我が宗教教育の方針である」(三二五―三二六頁)。

田村が「児童中心のキリスト教」を具体的に展開したのは、一九二四(大正十三)年であった。この、大正時代は新しい教育の流れ、いわゆる大正新教育が全盛をきわめ、児童中心主義的なさまざまな主張と実践がなされた時代であった。田村の「児童中心のキリスト教」という主張も、そのような教育の流れと無関係ではないと思われる(久木幸男他編『日本教育論争史録・第二巻 近代編(下)』第一法規出版、一九八〇年、二三二頁以下)。

#### 四 『児童中心のキリスト教』

田村は『児童中心のキリスト教』表扉に、英国の画伯、ジョージ・フレデリック・ワットの「キリスト教の精神」と題する絵——子供たちが天国に迎えられるさまを描いている——を掲げている。そして、この絵は「キリスト教の精神は、天真爛漫たる無邪気な子供を保護し教育し、生れながら神の子たる天国のかたなる大資格を有する子供の権利を尊重し、一人たりとも其子供を罪人にせざる」(二―三頁)ことである、ということを示しているのだ、と告げる。彼にとつては、そもそもキリスト教精神そのものが「児童本位」、「児童中心」なのである。

なぜキリスト教が「児童中心」なのか、また「児童中心」でなければならぬのか、という点、田村によれば、まずキリストがいつも子供に対して「我にきたれ」と招き(二―一頁)、児童を中心に置かれたからなのである(一―三頁)。そして、キリストは子供の価値を認め、子供が軽んずべからざるものであることを実例をもつて教えられたからなの



である(一〇六頁)。彼は、その実例としてマルコ一〇章一三一―一六節を引用し、弟子たちが集まってくる子供たちに無礼な言葉を発したのに対して、キリストが顔を赤くして怒り、「何を云ふか子供は神の子にして、天国に入る資格を有して居る、汝等も子供の如くにあらざれば、天国に入る事はできぬ、子供は決して軽んずべきものではない」と語られたできごとを挙げている(九二―九三頁)。そして、キリストは「子供の如く」なるように勧めているが、子供は先天的、本能的に神を愛するものであり、子供は愛の化身なのである(五六、六五頁)。神を信任し、神に服従することにおいては子供が模範的である(五七頁)。その点で、子供は大人の模範たりうる存在なのだ、と主張する。このキリストによって我らはじめて子供の価値を知ったのであり、このキリストの考え方が宗教界や教育界に大きな影響を与えたのである(五五頁)、という。

前にも触れたように、田村にとっては心理学や教育学といった近代的な学問がそれ自体独自に子供を理解し、教育しうるものではなかった。なぜなら、そもそも人間は生まれながらにして「神の子」としての資格を有しているからである。この「神の子」としての資格というものは、神によって造られた人間が、神に結びついていく性質のようなものである。

キリストが子供を重んじ、尊んだのも、子供がこの「神の子」としての資質を有しているからであった。キリストは「児童は神の子なりと云ふ理によつて、児童を貴び給ふたのである」。そもそも、子供は生まれながらにして本能的に神の子たる資格を有している、あるいは、神の子の種を持って生れてきたのであり、この種に水をかけ、太陽の光を照らしていけば種は必ず成長して、神の子の実を見るのである(四八―四九頁)。これは人間が生まれながらに備えている宗教心といったようなものである。そこに彼は、人間、および、子供の尊厳の根拠を見ていた。そしてそれ

は、キリスト教信仰となつて実を結び、さらには道徳心となり、善良な人間をはぐくむものであつた。ここには、海老名弾正などの、人間の中に「神の子性」を見る見方との共通性が見て取れる。

子供は生まれながらにして「神の子の資格」を有しているとはいへ、これは水をかけ、太陽の光で照らす、つまり、教育による導きが不可欠なのである。もちろん、彼は「児童が自分でキリストに来る力を有している」(一二頁)とも表現している。これは先天的、本能的に「神の子の種」はそれ自身が発展して実を結ぶ力を宿しているということであろう。しかし、彼によると、子供は周りの環境や教育の影響を受けやすいのである。このことについて田村はフロイトの考え方や「潜在意識」という心理学の用語を用いて説明する。『児童中心のキリスト教』ではフロイトの考え方を紹介して、一―七、八歳までの子供のときに見聞きしたものが心の中にずっと残つて大きな影響力を持つのであり、他方、大人になつてから見聞したものは心の底にあまり残らないのだ、として、子供のときの宗教教育、さらには、幼稚園事業が急務であることを主張する(四四―四五頁、一〇二頁以下)。また、大正幼稚園が設立された一九一九(大正八)年に出版した『子供の心理』の中ではそれを「潜在意識」としている。すなわち、子供のときに経験したことが潜在意識となり、それが大人になつてから、不意に浮かび上がってくるのだ、という。とくに、宗教教育と潜在意識は密接に関係するのであり、キリスト教的な回心もその潜在意識から起こってくるのだ。赤ん坊のときから神の教えを全く聞いたこともない青年が急に回心するはずはないのだ。したがつて、幼いときからの宗教教育が必要なのだ、という。このような彼の批判は、これまでも述べたように、必然的にリバイバル批判となつていく。

たしかに、二十世紀大挙伝道によりリバイバルが起こり、教会は盛んになった。しかし、そこが問題なのだ、と田村は言う。いわゆるリバイバル病である。リバイバルでたしかに多数の人々がバプテスマを受けてもそれらの人々は

名ばかりの信者で、真のキリスト者ということはできない、という。さらには、リバイバルで多数の者が改心し、信者となるのは群集心理によるのである。この群集心理は感情が激昂したものであり、焼き打ちなどと同じ心理状態であり、危険この上もない。そのうえ、リバイバルの後姦淫罪に陥る人が多いが、これは感情が激昂した結果によるのだ、という(七九一―八〇頁)。またさらに、リバイバルの盛んなアメリカを例に挙げて、リバイバル運動から児童中心の教育的な伝道へと変わりつつあるのだ、と語って自分の見解の正当性を論証している。また、日本は仏教国であり、寺の鐘の音をはじめとして、子供たちの潜在意識の中に仏教が深く入り込んでいる。そうした中で、キリスト教的な素材のない大人にいくら説教しても効果がない、というのである(八七―九〇頁)。

また、田村はリバイバルによる劇的な改心と教育による漸次的な改心の二つの改心のタイプを、ウィリアム・ジェームズの「二度生れるキリスト者と、一度生れるキリスト者」という言葉を引用しながら説明を加えている。前者の改心の代表者はパウロであり、後者のタイプの代表者はテモテである。つまり、パウロは劇的な改心を経てキリスト者になったのに対して、テモテはクリスチャンの家庭に生まれ、その家庭の教育と感化のもと「木の実が熟するが如く自然的に、一步一步と、キリストに養われ、知らぬ間に、キリスト者になった。従来のキリスト教は、パウロをキリスト教的な改心の唯一のお手本としていたが、そうではなくて、テモテの改心も立派なキリスト教的な改心であり、「児童中心のキリスト教」はこのテモテの改心をそのお手本にするのだ、という(七四頁)。

これからさらに、彼はパウロの神学に対する批判に向かう。彼によると、キリストが子供を中心に置いたのに対して、パウロはリバイバルによって罪人である大人を改心に導く「大人本位のキリスト教」の代表者である。彼にとつては、キリストのキリスト教、子供中心のキリスト教が本来のキリスト教である。パウロのキリスト教は、子供の教

育には罰、こらしめということを中心にし、妻に対しては絶対的服従を要求しており、彼の神学からは子供や婦人について良い教訓を得ることはできない、という（一三、一六一―一七頁）。

これに対して、キリストのキリスト教こそが子供の個性、価値、独自性を認める「子供本位」のキリスト教であり、そのキリストの教えに立ち返らなければならないのだ、という。

また、彼によるとキリストの子供中心のキリスト教は積極的なキリスト教であり、パウロのキリスト教は消極的キリスト教である。つまり、パウロのキリスト教は、罪人を招いて改心させるのが主眼であり、それは壊れたものを直すようなものであり、消極的なキリスト教だ、という。他方、キリストのキリスト教は教育によって、「亡びない様に壊れない様に、防御するもの」であり、積極的なキリスト教なのだ、という。彼にとつては、一九一四年から一九一七年まで欧米のキリスト教諸国を中心舞台として繰り広げられた第一次世界大戦も、彼の「児童中心のキリスト教」の必要性を裏付けるものであった。キリスト教国を任じていた国々がこの大戦争に走ったのは、「罪人の救済なる消極的事業にのみ熱中し、積極的な天真爛漫たる子供の教育を無視して」きたからなのである（三一―四頁）。社会を善良に導き、争いをなくすために必要なのは、伝道に精力を傾けることではなく、むしろ、教会を児童本位にし、児童の教育に力を注いでいくことなのである、と彼は主張する。

田村は最後に、「児童中心のキリスト教」のキリスト論的な根拠付けを試みる。「キリストの御生涯は、我は神の子であると云ふ觀念が一貫して居った」。「子といふ思想がキリストの全身を満して居った。キリストの御心の内に、世の罪悪人を救ふと云ふ思想は、第二位にして勿論我は神の子である。子たるべきものの第一になすべき事は、天父の御意に従ふと云ふ思想が第一位を占めて居った」（一一〇―一一一頁）。つまり、キリストの生涯は「神の子」として

の觀念、いやむしろ、「神の子」としての意識と言つたほうが適切であろうが、その「神の子」意識が一貫してゐた、というのである。この「神の子」であるという点でキリストと子供は結びつき、子供はキリストと同一の地位に位置づけられる(一一一頁)。さらには、子供の心とキリストの心は結びつき(七頁)キリストは「子供のチャンピオン」であり、子供の友、子供の生命(一一〇頁)である。また逆に、「子供はキリストの代理公使」であり、キリストと等しく位置づけられ、尊重すべき存在とされる。

もちろん、キリストが神の子であるという意味であれば、大人も「神の子」として位置づけられるのが当然であろう。しかし、田村はあくまでも子ども中心を貫く。そこにはおそらく、子供が「神の子」としての先天的、本能的な資質をより純粹な形で保つてゐるという、子供に対する樂觀的な、もしくは、理想主義的な見方が入つてゐるものと思われる。これは大正期の日本に広く見られることでもある。

田村によれば、この「児童中心」の思想に、他の宗教には見られないキリスト教の独自性があるのである(一一〇頁)。つまり、児童について触れ、児童を尊重してゐる宗教はキリスト教だけではないか、というのである。そして彼は、そもそもキリスト教は「血のある涙のある親子の關係を教ふる宗教である」という。これは、従来、キリスト教が親孝行を説かないとして批判されてきたことに対する田村なりの弁証であらう。

## 五 むすび

田村直臣はキリスト教の草創期に、キリスト教の伝道だけではなく、婦人や子供の社会的地位の向上、人權の確立

のために先駆的な働きをした。それらは欧米社会や欧米の文献がモデルになっている。しかし、彼の言論は、当時の日本においてはあまりにも先駆的であり、またその過激さのゆえに反発を呼び起こしさえもした。彼の主唱する「児童中心のキリスト教」にしても、その聖書理解、パウロの神学批判は一面的であろう。また、彼の児童観はあまりにも楽観的であろう。しかし、そうした欠点はあるとしても、当時の、子供がないがしろにされるような状況のなかで、子供の権利を主張していったこと、および、キリスト教会の中に子供を位置づけていこうとしたことは、十分に評価されてしかるべきであろう。

田村は自身の「児童中心のキリスト教」に対してキリスト教の主流派からさまざまな批判を浴びる中で、自分同様キリスト教の主流派からは閉め出されていた内村鑑三が、生涯最後の努力として幼児教育のために尽くしたい、と書いているのを読んで、内村が自らと同じ幼児本位に移ったのだとして喜びと感謝の思いを表している（『信仰五十年史』二八三―二八四頁）。

## 註

- (1) 田村について触れた代表的な著作は、大田愛人『開花の築地・民権の銀座——築地バンドの人々——』築地書館、一九八九年、一八三―二二一頁、秋山繁雄『明治人物拾遺物語——キリスト教の一系譜——』新教出版社、一九八二年、一九―二一六頁など。
- (2) 小沢三郎編、杉井六郎校注『田村直臣の『日本の花嫁』事件——キリスト教社会問題研究』一九七六・十二、一九七
- 七・十二、一九七八・十二、一九八一・三など。
- (3) 工藤英一『明治期のキリスト教』教文館、一九七九年、二〇七―二三三頁。
- (4) 佐波亘編『植村正久とその時代』第二巻、教文館、一九七八年（復刻）、三七―一頁。
- (5) 比屋根安定『教界三十五人像』日本基督教団出版局、昭和三十四年。
- (6) 山本忠興『日本日曜学校史』日曜世界社、昭和十六年、

十九頁、『七一雜報』明治十一年五月三十一日号。

(7) 前掲『日本日曜学校史』四六、四七頁。

(8) 比屋根安定、前掲書、一〇六頁。

(9) 勝尾金弥「小波に先行する〈童話〉の試み——田村直臣の『童蒙』訳業」愛知県立大学『児童教育科論集』第二二号、一九八八年三月、一四—二二頁。

(10) 『明治キリスト教児童文学史』久山社、一九九五年、七一頁。

(11) たとえば、関口安義「児童文学の成立」『研究Ⅱ日本の児童文学Ⅱ、児童文学の思想史・社会史』東京書籍、一九九七年。

(12) 工藤英一『明治期のキリスト教』教文館、一九七九年、二一三—二二四頁。